

明治三陸地震

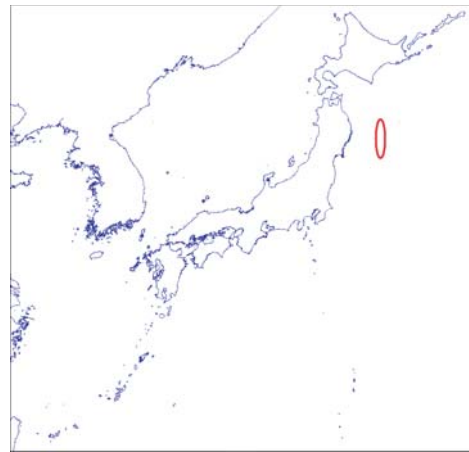
災害の概要：

発生日時：1896年6月15日19:32

規模：マグニチュード8.2

発生場所：岩手県の東沖の日本海溝付近

地震の種類：東北日本（陸）のプレートと、その下へ沈み込む太平洋プレートとの間のプレート間の比較的浅い部分に発生した巨大地震。



死者数：21,959人

流失家屋：1万軒弱

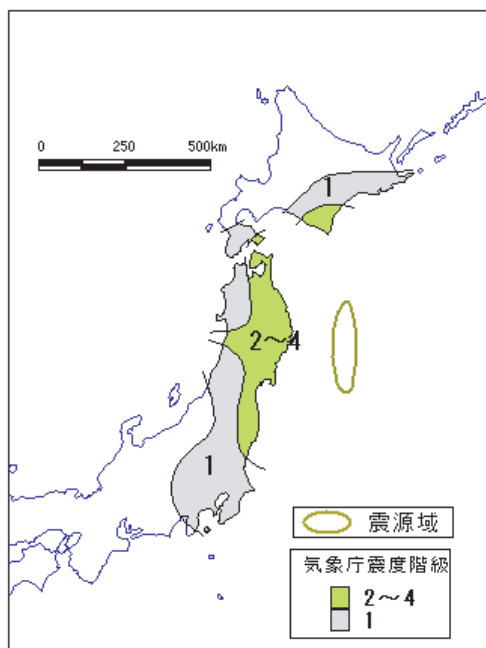


図1. 明治三陸地震の震度

しかし揺れから35分後、高い津波が三陸沿岸の村々を襲いました。最も波高の高かった大船渡市の綾里では、30mの峠を越えた綾里湾からの津波がひとつ南の湾に流れ下ったほどで、逃げ場を失って村人の半分以上が犠牲となるなど、リアス式海岸の漁村の村々は甚大な被害を受けました。岩手県だけで死者は実に18,158人でしたが、宮城はもちろん、青森、北海道でも犠牲者がでました。ハワイや北米サンタクルスまで数mの津波が到達しました。

津波は地震によってずれ上がった海底が、海水を持ち上げることから始まります。数十秒から数分で動かされた海水の高さ数m程度の乱れが、波として伝わります。この波は、津（＝入り江）に入るまではよく判らない程度のゆったりしたもので、分速十数キロで進みます。海岸近くなって水深が浅くなると高さが急激に成長し、十数mにも達し、沿岸の列車すら押し流す破壊力をみせます。海岸近くで地震の揺れを感じたら、高台へ念のため避難する用心が命を救うのです。

明治三陸地震は、旧暦端午の節句の夕餉のころに発生しました。日本海溝に近いプレート境界の浅い部分で発生したため、地震動はさほど大きくなく、ゆっくりと長くゆれました。「地震→津波→高台へ避難」という知識を十分持っていた三陸地方沿岸部の人々ですが、節句の祝膳を囲んだ後だったこともあり、さほど大きい地震ではないという判断で早期避難をする人は殆どありませんでした。

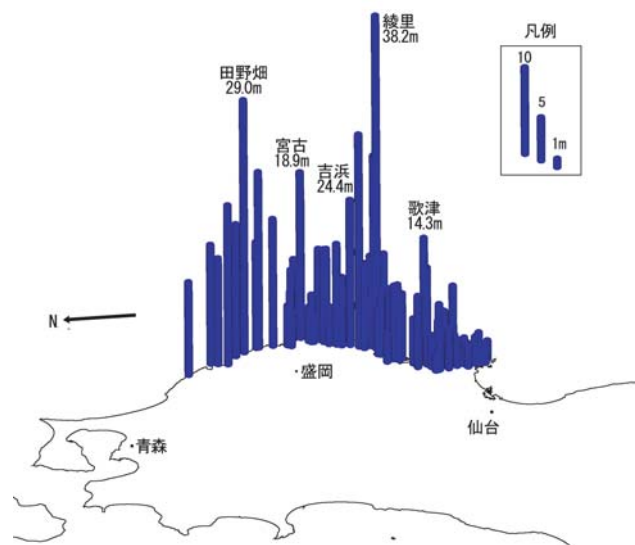


図2. 明治三陸地震の三陸地域での津波の高さ